昭和52年12月17日第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）平成21年4月1日発行 すこやかファミリー第593号

「脱メタボ・ライフ」の提案誌

# すこやかファミリー

2009
APRIL 4

健診アフターケアガイド
## 健診セーフでも安心するな

栄養120%クッキング
## 代謝力アップメニュー

# 過多月経のマイクロ波子宮内膜アブレーション

月経血が多すぎ、生活にも支障をきたす「過多月経」。その治療法として、子宮をとることなく月経血を減らす効果の高い新治療が登場しています。

## マイクロ波で子宮内膜を加熱し、壊死させる

日本産科婦人科学会では月経時の出血量が140㎖以上を過多月経と定義しています。量が多くても問題なく生活している人もいる一方で、外出できない、貧血をおこすなど日常生活に支障をきたしている人もいます。

「たとえば、夜用のナプキンを昼も使っている人は治療の対象となる過多月経といえます」と話すのは、東邦大学医療センター大橋病院の浅川恭行先生です。

原因となる病気は、子宮筋腫、子宮腺筋症、まれに血液凝固障害などさまざまで、約1割は原因不明です。

従来の治療法は、大きく分けて「薬物療法」と「子宮摘出手術」でした。

薬物療法は、ホルモン剤や低容量ピルなどがありますが、ホルモン剤は骨がもろくなるなどの副作用があったり、低用量ピルでは人によっては効果がでないこともあります。

子宮摘出手術は、多くが開腹手術で、約2週間の入院が必要です。負担の少ない腹腔鏡手術も行われていますが（浅川先生も行っている）、子宮をとることには変わりなく、ためらう人も少なくありません。

「マイクロ波子宮内膜アブレーション」は子宮をとることなく、短時間でできる治療法です。細い棒のような器具を子宮に入れ、超音波画像を見ながら、子宮内膜をマイクロ波で焼灼（しょうしゃく）していきます。

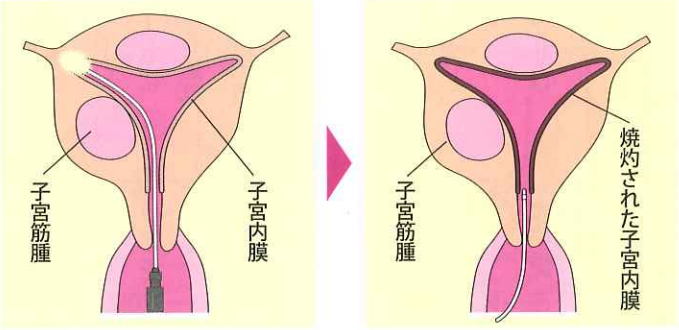
手術時間は約10分間と短く、入院期間も2泊3日程度ですみます。浅川先生が担当した症例では、術後すべての人が月経血の量が減り、3分の1の人は、月経がなくなったそうです。

なお、対象となるのは、手術療法が必要で、妊娠・出産の希望がなく、子宮を残したい人です。子宮筋腫の人も治療可能ですが、治療後、筋腫が大きくなると摘出手術が必要になることもあります。

「過多月経で悩んでいるが、仕事や子育てのために長期入院できない人にも治療の選択肢が広がったことに意味があります」と浅川先生は話しています。

★この治療は、東邦大学医療センター大橋病院のほかに、大阪市立大学医学部附属病院、横浜市立大学附属市民総合医療センター、島根大学医学部附属病院などでも実施しています。

### ■マイクロ波治療の進め方




直径約4㎜のアプリケーターを腟から子宮に入れ、先端からマイクロ波を出し、子宮内膜を焼灼する。

まんべんなく焼灼し、子宮内膜を壊死させる。これにより、月経血を大幅に減らすことができる。

●東邦大学医療センター大橋病院では、現在、この治療を自由診療として行っています。費用は、入院代なども含め約30万円です。なお、過多月経のマイクロ波子宮内膜アブレーションは、昨年末、「先進医療」として認められました。近い将来、同病院でも先進医療として実施する予定です。

マイクロ波子宮内膜アブレーションで使用される装置

マイクロ波手術器

マイクロ波用アプリケーター

●取材協力
東邦大学医療センター
大橋病院（東京都）
産科婦人科学講座講師
浅川 恭行 先生